

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

木村 晶子

△論文要旨△ 平和の実現には、真の対話が必要である。フィリピンの状況においては、まずカトリック信者の間にあるイスラムに対する偏見や誤解、さらに強者の論理を取り除くことが必要である。また、これまでの対話はいまだキリスト教優位の姿勢が強いことを反省し、相互に聞き合い、ともにパートナーとして成長し、回心の道を歩むことが求められる。そして、単に理論的な対話ではなく、互いの信仰生活における霊的な交流を深め、ともに兄弟姉妹であるという意識を浸透させてゆくことが最も大切である。このためには、指導者レベルの対話とともに、イスラム教とキリスト教の信徒間の草の根運動やNGOなどによる民衆の意識改革、平和教育が必要不可欠である。このような運動の実践は根気と忍耐が要求されるが、このプロセスを経て相互に理解と受容が可能となるのではないだろうか。

△キーワード△ 平和構築、宗教間対話、相互回心、生活レベルの交流、草の根運動

はじめに

カトリック教会は、第二バチカン公会議後、諸宗教に対する姿勢を大きく変え、「対話」ということばが中心となった。「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」(Nostra Aetate)には、すべての宗教、特に、ヒンドゥー教、仏教、イスラム教、ユダヤ教に、肯定的な価値を認めるということが述べられ、霊的な交流が推進されている。⁽¹⁾これは、それまでのキリスト教絶対主義的態度からすれば、非常に画期的なパラダイム転換で

あった。

しかし、対話が叫ばれてから四十年になろうとしているにも拘らず、対話は実現可能のように思われない。今もアジアやその他の各地でテロ事件が相次いでいるという現状である。対話の実践、あるいは対話による和解は、机上の理論にすぎないのであるか。

本稿では、フィリピンのカトリック教会の平和への取り組みを通して、対話が可能なのか、またその問題点や障害となっている点は何であるのかを考察してゆきたい。

一 ミンダナオにおける対立の歴史

フィリピンでは、カトリック教徒が人口の約八三%を占めており、イスラム教徒は五%である。この五%のイスラム教徒の多くは南ミンダナオ島に集中しており、約二百万人が「イスラム自治区」を形成している。しかし、この地域にはキリスト教徒も入り交じって居住していたために、南ミンダナオはフィリピンのなかで最もイスラムとクリスチャンとの対立が激しい地域となってきたのである。では、なぜこのような対立がミンダナオに多く、それはいつ頃始まったのであろうか、その歴史に目を向けてみたい。

ミンダナオには、元々、ルマドといわれる先住民族が住んでいた。十世紀頃になると、アラブの商人たちが交易を求めてフィリピンにもやって来るようになり、南ミンダナオの地域に住み着くものも現れた。それと同時にイスラム教ももたらされる結果となった。つまり、スペインが一五二一年にフィリピンを発見したと発表するはるか以前に、イスラムはすでにフィリピンの島々、特に、スル諸島やミンダナオ島などに居住していたのである。こうし

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

て、十五世紀半ばには、スルタン、シャリフ・ウル・ハシムが「スル王国」を、十六世紀初頭には、シャリフ・ムハマド・カブングスワンが「マギンダナウ王国」を建国した。後にブアヤンとその他四つの連合国などいくつかの小国が形成され、南ミンダナオの地域はイスラムの人々による統制のとれたひとつの国となっていたのである。この時代には、先住民族のルマドと十三のバングサモロ族（イスラム）が平和裡に共存してきたのである。しかし、その後、スペインの侵入（一五六五―一八九八）により、大勢のキリスト教徒がフィリピン各地に点在するようになった。スペインはフィリピン全体をキリスト教に改宗させようとしたために、イスラムとの対立が始まってしまったのである。イスラムの人々は独立を守ろうと軍を組織し、あくまでもスペインに抵抗し続けたが、十九世紀中頃、キリスト教徒がルソンやビサヤから移住し、キリスト教徒はますます大多数となっていった。スペインはイスラム教徒を支配し、改宗させることはできなかったが、経済封鎖をすることによって、イスラムの人々に大きな打撃を与え、イスラムの人々はますます辺境に追いやられてしまったのである。そして、キリスト教徒との間の溝は深まる一方であり、イスラムに対する強い偏見や憎悪がますます強くなってしまったのである。現在の対立の原因はこの時代にあると言ってよい。その後、アメリカの統治下（一八九八―一九四六）になっても、イスラムに対する偏見や差別は変わらず、対立は続いてきたのである。⁽²⁾

一九四五年、独立してフィリピン共和国となったが、フィリピン政府は民族の違いや生活様式の違いを考慮に入らず、また、植民地時代の偏見を取り除かないまま、イスラムを「犯罪集団」、「ゲリラ集団」であるとして一掃する方針を決めた。その結果、イスラムの人々は、このような政府の扱いにますます不満を募らせるようになっていったのである。

一九七〇年代初頭、ミンダナオの少数民族であるイスラム教徒は、イスラム国、「バングサモロ」の独立を目指して活動を開始した。この活動は主に、南ラナオ、北ラナオ、マグインダナオ、そして島の中心部である北コタバト、南コタバト、スルタン・クダラトなどの境界地域で起こった。このとき、フェルディナンド・マルコス政権は軍隊を送り、これを鎮圧した。

一九七六年十二月二十三日に執り行われた、トリポリ協定によって、一部の自治が認められたが、一九七八年以降、再び戦闘が開始された。しかし、このとき、イスラム戦線も足並みが揃わず、最初に結成されたモロ民族解放戦線(MNLF Moro National Liberation Front)と、そこから分かれた一層過激なグループ、モロイスラム解放戦線(MILF Moro Islamic Liberation Front)二つのグループに分かれてしまった。

この後、何年もの間ゲリラ戦が続き、一九八九年、コラソン・アキノ政権は十三州に自治権を認めたが、それに合意したのはこのうちわずか四州(マグインダナオ、南ラナオ、スル、タウィ・タウィ)⁽³⁾であった。一九九六年九月、MNLFは「南フィリピン和平開発協議会」設立を認め、和平合意書に正式調印をし、ラモス政権の提案に従って、四つの自治州を含む「ミンダナオイスラム自治区」に合意した。このとき、多くの民兵は政府軍や警察に転向し、リーダーのヌル・ミスアリが自治区の代表となった。しかし、一万五千人からなるMILFはこの協定を不服として、新たな武装集団「ムジャヒディン」を結成し、ゲリラ戦を強化して、新たなテロ活動へと入ってしまった。こうしてまた、多くの市民や宣教師たちをも含む、虐殺や誘拐が相次ぐ結果となってしまったのである。二〇〇〇年七月、エストラダ大統領は、MILFに対して、政府軍を送り、弾圧を行ったが、そのため、新たに三十万人の難民を生むこととなった。⁽⁴⁾

その後、二〇〇一年一月二十八日、マギンダナウのスルタン・アブドゥル・アジズ・グイワン・マストウラ・クダラト四世をはじめとする、バングサモロのリーダーたちが、コタバト市に集まり、バングサモロの独立をもう一度得たいという強い願いを申し入れた。そして、「われわれはフィリピン人ではなく、バングサモロ人である。」という声明を発表した。⁽⁵⁾ その年アロヨ大統領が就任すると、リビアのトリポリにおいて、フィリピン政府とMILFとの間で「トリポリ平和声明2001」が取り交わされ、この時フィリピン政府は、バングサモロ州の自治権を認め⁽⁶⁾た。それによれば、「国際人権法の遵守及び、国際的に認められている基本的人権の尊重、難民の保護、バングサモロ人の政治的自治、宗教の自由を認める」としている。しかし、この協定にも満足せず徹底抗戦を続けるグループがあり、特にアブサヤフ (Abu Sayaf)⁽⁷⁾ はカトリックの司教をターゲットとしてテロ行為を続けている。さらに追い討ちをかけるように、二〇〇一年九月十一日に同時多発テロ事件が起こり、事態は悪化の方向に転じてしまい、世界がイスラムを「テロリスト」、あるいは、「テロリストをサポートしている集団」と認識してしまう結果となった。

二 対話と平和構築への努力

先にみてきたように、これまでのところ、平和の実現は非常に困難であるように思われる。過去三十年間に亘る政府軍とモロ戦線との武力衝突で、少なくとも十二万人が死亡していると言われ、イスラム側にもキリスト教徒の側にも兵士のみならず、多数の教会関係者や民衆が犠牲となっている。さらに、ミンダナオにおける衝突によって、インフラは破壊され、経済が麻痺し、ますます貧困状態を悪化させている。そして、貧困の度合いが増すと平

和や発展のためのプロジェクトの進行を難しくするというような悪循環が繰り返されているのである。⁽⁸⁾

しかし、このように苦しい状況の中でも全く希望がないわけではない。テロについては大きく報じられるが、民間の小さな活動についてはほとんど情報が知らされないため、平和への歩みは皆無であるかのように思われがちであるが、実際にはかなり以前から、キリスト教徒・イスラム教徒双方によっていろいろな努力が払われ、近年少しずつその努力が実を結んできているのである。この努力は宗教指導者間で行われていたり、信徒間であったり、NGOであったりとさまざまな形でなされているが、次に具体的にその歩みをみてみたい。

1 カトリック教会司教団とイスラム指導者との対話

フィリピンにおける宗教間対話は一九七〇年代から始まり、プロテスタントとカトリック、マラウイやコタバト、ジョロのイスラムの指導者たちがその努力をしてきた。一九九二―一九九三年にかけては、平和推進会議が開かれ、対立の原因を明らかにするため宗教者たちが招集されることもあった。しかし、ミンダナオの難しい事態を開解するためにはさらに徹底した話し合いと実践が必要とみて、一九九六年七月、五人の司教と十人のウラマ（イスラム指導者）がアテネオ・デ・マニラ大学に集まり、平和構築のための話し合いを始めた。これが「司教・イスラム指導者フォーラム」(BUF Bishops-Ulama Forum) の開催のきっかけとなった。

フォーラムは主として衝突の起きやすい地域で開催され、第一回は、一九九六年十一月二十九日セブ市にて行われた。一九九七年には、ダバオ市、マラウイ市、カガヤン・デ・オロ市、ザンボアンガ市において開催され、一九九八年も、サントス市、イリガン市、パガディアン市において行われている。その後も毎年三―四回ずつ定期的に続けられ、現在にいたっている。BUFのメンバーは、ミンダナオのカトリック司教団とイスラム指導者、そして

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

プロテスタント合同委員会である。このフォーラムの目的は、「唯一の神の信仰、共通の起源に基づいて、相互の宗教的伝統を尊重し、霊的なレベルで平和を目指す」ことである。政府とモロ解放軍との間では、政治的・社会的・経済的開発の面での協定を結ぶが、これは結局一時しのぎにすぎず、根本的な解決にはなっていない。そこで、BUFは政府とMILFの双方に働きかけると同時に、⁽⁹⁾これまで失敗してきた多くの見えない部分、特に、霊的・文化的な面を土台として、平和を構築することに力を入れることで合意した。つまり、文化的対話を通して平和を推進し、共通の関心事について、対話を行うこととしたのである。BUFのメンバーは、各地域ごとに対話集会を開き、一般民衆の団結と平和促進を支援することに努めた。特に、キリスト教徒とイスラム教徒が双方とも偏見を取り除くための教育が必要不可欠と考え、平和センターや学校で、民衆レベルでの平和構築のワークショップを開いたり、平和教育を学校のカリキュラムに加えるよう、NGOとともに指導してきた。このような活動は、ミンダナオのイスラム教徒とキリスト教徒、そして先住民間の相互理解や和解を促がす上で、大きな原動力となった。その後、ラモス大統領もこの会議の意図に賛同し、政治的協定のみでは限界があることを認め、この動きは、エストラダ大統領にも引き継がれた。現在、イスラム問題のオフィスは大統領のオフィスによって設立され、そこから基金を受けている。主にイスラムの儀式の奨励や、メッカ巡礼への援助などがなされている。また、ミンダナオの経済発展に貢献したイスラムの人々と協力し、平和を構築することに力を注いでいる。

さらに、ミンダナオでは州や市がスポンサーとなって、「平和と開発サミット」も開かれるようになった。このグループのメンバーは、モロの独立に固執することを止め、イスラム教徒とキリスト教徒が共存してゆく方法を見出すように働きかけている。確かに、スル・タウイ・タウイやバシランやパラワン⁽¹⁰⁾の島々は、歴史的にバングサモ

口の土地であったが、現実には、キリスト教徒や先住民族なども住んでいる。それゆえ、兄弟性を推し進めて、実生活の面で相互に協力してゆき、共生できる地域を確立してゆくことが最も望ましい方向であろう。

また、BUFは霊的な面での対話の必要性を訴え、コーランと聖書を互いの大切なたまものとして認め合うことによって、霊的レベルで交わることを強調する。そして、イスラムもプロテスタントもカトリックも、神が命を与え、命は神聖なものであり、「殺してはならない」という神の掟においては共通であり、この原点に立ち戻るように促している。こうして、BUFの指導のもと、人々はともに祈禱集会をもち、相互の信頼関係を固めることによって、偏見や憎しみ、間違ったプライドから次第に解放されるようになってきている。

特に、キリスト教徒側の誤解や思い込みを正すことにも力を入れている。大多数のクリスチャンは、「イスラム」の本当の意味を知らず、「アブ・サヤフ」というとイスラム過激派を指すという短絡的解釈になってしまっている。また、モロ解放戦線というのは、MNLFや MILFのみであって、「アブ・サヤフ」は別のグループであり、テロ組織であるが、その区別も理解されていない。実際、「アブ・サヤフ」はイスラム教徒とは言えず、このグループはイスラム教徒からも、「非イスラム」とみなされている。それゆえ、すべてのイスラムがモロ解放戦線や「アブ・サヤフ」のメンバー、あるいは支持者であるとみなすのは大きな誤りであるが、多くのキリスト教徒はこの点に気付いていない。事実、ミンダナオのイスラムはMILFや「アブ・サヤフ」のメンバーではなく、むしろ、この武装集団に悩まされているのである。しかし、このような誤りにも拘らず、クリスチャンは善であり、イスラムは悪であるという構図が出来上がってしまった。このような誤った判断に基づいて報道したり、伝達することは不当であり、大変危険である。フィリピンにおいて大多数のキリスト教徒がこのような偏見や誤解をもっている

とすれば、当然対立の原因となり、イスラム教徒はますますネガティブな感情を強めてゆくことになる。それゆえ、司教団はまず、キリスト教徒の意識改革を先に推し進めようと努力しているのである。⁽¹⁰⁾

2 ミンダナオの司教・司祭の積極的行動

BUFの活動とは別に、対立の最も多いミンダナオ地区の司教・司祭団は、政府とMILFとの戦闘行為を阻止するため、積極的に両者間に介入し、和平へと導こうと多大な努力を払っている。たとえば、二〇〇〇年四月、復活祭に際し、ザンバシリ（ザンボアンガ・バシラン・スル・イピルの合同教区）の大司教と司教団によって公布された書簡にはその熱意がよく表れている。司教団は、「平和は神から来る」という宗教の原点に立ち返るよう求め、「私たちは皆、神の子であり、アラの民です。私たちはイスラムもクリスチャンも、ルマドもみな平和のために祈る義務があります。」とアピールしている。そして、互いに兄弟姉妹として受け入れること、対話を通して、相互理解、謙遜、正義、共感、和解と愛を持つこと、すべての排他主義や排斥をやめるようにと呼びかけている。さらに、政府に対しては、リーダーシップを取ってあらゆる犯罪に立ち向かい、国民を貧困から救うために、生活上のためのプロジェクトを奨励するように促し、警察や軍隊に対しては、法を遵守し、人間の権利を尊重し、犯罪を阻止する職務に忠実であるようにと進言している。また、テロリストたちに対しても、「われわれと同様に神の子・アラの民に属するものである」と呼びかけ、これ以上兄弟・姉妹に悲しみや痛みを与えるのをやめるようにと訴えている。⁽¹¹⁾

さらに、同年五月七日には、コタバト教区の大司教オーランド・クエヴェドが代表となって、フィリピンカトリック司教団の意向として政府とMILFに宛てて書簡を送り、和平とすべての民族の共存を強く訴えている。

また、五月二十五日には、次のような同司教のメッセージも述べられている。

平和について話すとき、次のことが必要である。

- 1 対話の力を信じること。
- 2 何よりもまず、普通の生活ができる状態にすること。
- 3 耐え忍ぶこと。苛立ちや憤りはあっても、互いに忍耐強く状況を解決すること。

さらに、次の平和協定のための五項目を提唱している。

- 1 停戦の日を設定し、武器を持たずに話し合いができるようにする。
- 2 すべての高速道路を通れるようにし、安全を約束すること。
- 3 難民が安全に元の家に戻れるように、ある特定の日を設定すること。
- 4 難民が安全に仕事に就き、村を再建できるようにする⁽¹²⁾。
- 5 誤解や危険をなくすために、パトロールをしたり、お互いに身の安全をはかることを合意する。

このように司教団は、戦闘行為はけっして解決にならないこと、一般民衆の犠牲が大きく人権が著しく侵されていること、そして、武力抗争はミンダナオ全体の経済や生活のマイナスになることを、強く訴えている。また、冷静に対処する事を勧め、しばしば平和委員会から提案されたことばに対する誤解が生じている点を指摘している。

さらに、第三者がオブザーバーとして、平和構築の過程を見守ることの必要性も挙げている。こうして、ミンダナオの司教団はときには生命の危険も感じながらも、平和への願いを訴え続けているのである。

3 コタバト教区の実践

次に、コタバト教区においてなされている平和構築の実践例をみてみたい。この報告は、ロベルト・レイソン神父（OMI）が、アジア司教会議の席で発表したものである。⁽¹³⁾

ロベルト神父がコタバト州のピキトに赴任したところ、状況は大変不安定であり、平和のために活動してきたBC（クリスチャン基礎共同体）のメンバーが殺されたり、一九九七年二月四日には、十九年間イスラム教徒とともに働いてきたベン・ド・イエズス司教が殺害されるという大事件も起きた。また、再び、政府軍とMILFとの間に戦闘が起き、一万五千人の市民（その多くはイスラム教徒の女性たち、子どもたちや老人である）が避難しなければならぬという事態になった。一九九九年三月、また戦争が勃発し、四万一千人が難民となり、ミンダナオの他の地域でも、七十万人が避難した。ピキトでは約百名が死亡し、八〇〇戸の家が崩壊してしまった。丁度このとき、政府とMILFとの間で和平交渉が行われている最中であつたので、このような事態は大きなつまずきとなり、多くの人々が平和の実現に自信をなくしてしまった。

しかし、ロベルト神父は最悪と思われる状況の中から、一步を踏み出した。ラジオで戦闘を中止するよう訴えたり、イスラム教徒もキリスト教徒も分け隔てなく、難民の救済を始めた。ロベルト神父自身も最初は、イスラム教徒を助けることに躊躇があつた。それは、教区の信徒の理解がなかなか得られないでいたからである。ミンダナオでは、「平和を指示する」というと、「敵に属する人」と受け取られがちである。つまり、その人はイスラム支持ないしは、MILF支持と思われるのである。ロベルト神父自身も、「Fr. Bert, OMI, MILF」と呼ばれるようになってしまった。⁽¹⁴⁾ キリスト教徒たちは「平和を望みますか」と聞かれれば「はい」と答え、「戦争を望みますか」と

聞けば、「いいえ」と答えるが、実際は戦闘が起こると、彼らの多くは政府軍がMILF軍を激しく攻撃するのを拍手しながら応援しているのが実態である。そして、「この戦争は平和を得るために必要なのだ」とさえ言うのである。ときには、この政府軍の掃討作戦が、多くのキリスト教徒の支持によって成功することもあるのである。この支持者のなかには神父や修道者も含まれているという悲しい現実もある。「イスラム教徒が死んでも、半分くらいしか同情しないが、キリスト教徒が死ねば、一〇〇%同情する⁽¹⁵⁾」という発言さえ聞かれることがある。ロベルト神父が戦闘のさなか、ラジオで戦争反対の声明を読み上げたとき、教区内の信徒のリーダーがやってきて、戦争反対のメッセージをやめるようにと抗議したこともあるという。また、イスラム教徒の難民に援助をしようとしたところ、「敵の家族を助ける必要はない」と言った信徒もいたという。ロベルト神父が援助をやめないうと、そのクリスチャンは教区の宣教司牧活動をやめて、他へ移っていったとのことである⁽¹⁶⁾。

しかし、ロベルト神父は、このようなさまざまな反論にあっても、貧しい人、困っている人を助けることは、キリスト教でもイスラム教でも同じであると信じて、両親を殺されたイスラム教徒の子どもたちを引き取り、難民の救済に着手し始めた。こうして彼は、コタバト教区、特にキダパワンに社会活動センターを設立した。ロベルト神父は、イスラム教徒とキリスト教徒とともに、ボランティアとして募ったが、彼のもとに、約四十名のボランティアが集まり、炎天下の中も、また、銃弾の中でも、難民キャンプを訪れ、食べ物配って人々を支え続けた。ボランティアに参加した青年たちは、同じテーブルで食べ、ともに祈り、ともに考えるようになっていった。誰かが亡くなったと聞くと、ともに泣き、悲しみを分け合うようになり、彼らには「敵」という感覚は失われていった。

この平和構築のプロジェクトに加わった一人のイスラム教徒は、七〇年代の戦争で母を失い、彼自身、六年間、

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

「ムジャヒディン」であった。しかし、現在は、平和構築のためのレクチャーをイスラム教徒にもクリスチャンにもしている。彼のイスラム教徒の友人は「母の復讐をするべきだ」というが、彼は、「罪のない人に復讐するのは、アラーに対する罪だ」と答えている。それゆえ、彼は自分のイスラム共同体のリーダーから、キリスト教徒になったのかと言われ、非難の対象とされたが、彼は信念をもって活動を続けていく⁽¹⁷⁾。ロベルト神父も同じ立場であるが、平和構築のためにはこのような乗り越えてゆかなければならない障害が多くある。

そのうち、一九九九年八月の戦争の最中、コタバト教区は避難民たちを元のナラパーン村に戻すためのプロジェクトを始めた。この村は、六五％がイスラム教徒、三五％がキリスト教徒、五％が先住民族である。この村の人々は自分たちの村を、「平和の空間」にしたいと望み、彼らの村や共同体を再建する機会を与えてくれるよう、武装グループに直接訴えた。教区の信徒も協力して、MILFやAFPと交渉し、人々の要求を尊重し、この村を再び戦場にしないようにと何度も折衝した。その結果、MILFや政府軍は撤退していったのである。さらに、教区は他のNGOの援助も求め、建築や農業、生活手段、水の供給、医療、インフラなど、すべての面で、再建が始まった。しかし、それは専門教育を受けた人々の援助を受けながら、できるだけ自分たちの力で実行されたのである。こうして十ヶ月後、ナラパーン村は少しずつ平和で結束力のある村へと変わっていった。この村の再建プロジェクトはモデルケースとして広まり、リーダーたちは、他の村にも招かれ、彼らの再構築方法を伝えるようになった。そして、他の共同体にも良い影響を与え、対話と平和構築のプロジェクトを指導するようになっていった。こうして、現在、ナラパーン村は住民と信徒との協力により、ミンダナオ島において影響力のある、希望の証となっている。

さらに、十一月から十二月にかけて、コタバト教区は戦争の犠牲になった子供たちを援助するプロジェクトを立ち上げた。カナダの援助基金から戦争孤児となった子供たちを養うのに必要な金額は得たものの、実際、教区内では、四十二もの村の面倒をみる人材はいなかったため、地方行政の力も借りて、各村の食料援助ボランティアを募った。二ヶ月間、週五回、四十二の村で、同時に、イスラムとクリスチャンの、合わせて一万人の子供たちへの食料援助が行われた。このとき少なくとも八〇〇人の母親たちが、イスラムであれ、クリスチャンであれ、参加したのである。また、三十人のイスラムとクリスチャンのボランティアが、戦闘によるトラウマを癒すためのカウンセリング講座に参加し、年齢も宗教も違うさまざまな子供たちの臨床にあたっている。

こうして、コタバト教区では、これらの経験を活かして、教区内のリーダーを中心として、平和文化セミナーを始めることになった。このセミナーはミンダナオの歴史や偏見の歴史、文化交流などを盛り込んで、イスラムの文化をより深く知ることを目指した。参加者はみな、輪になって各自の辛い体験を話し合ったが、そのなかで自分の部族が他の部族を互いに傷つけ合っていることに気付いた。そして、セッションの最後には、皆互いに抱き合い、許しを願ったのである。また、あるとき、ロベルト神父は、MILFのひとりの将校に声をかけられた。この将校は教区のセミナーのことを聞きつけ、兵士たちもセミナーに参加させてほしいと言ってきたのである。このような変化は、血の滲むような努力と長い時間をかけて産み出されるものであるが、平和を築く上で最も大切な土台となるのである。この体験による人と人との結びつきこそが連帯を生み、敵対関係をなくしてゆくであろう。

コタバトにおける努力はさらに大きな実りと変化をもたらしている。たとえば、それは修道院のなかにも起きている。現在、ピキトのオペレート会の修道院はイスラム教徒の修道院ともなっている。イスラム教徒の友人は修道

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

院を自分の家のように気軽に訪れ、ロベルト神父や他のキリスト信徒とともに食卓に付き、そのときには、キリスト教の食前の祈りも、イスラム教徒の祈りも交互にすることもある。また、家族を連れて訪ねてきたり、修道院に泊まってゆくこともある。ザンボアングアの「シルシラー」(Silsilah) イスラム―クリスチャンの対話コースを主催しているNGO⁽¹⁸⁾を卒業したイスラムの女性ボランティアが、半年間、修道院に滞在したケースもあった。

最初、教区の信徒たちは、イスラムの人がロベルト神父のところに訪ねてくるのをみて、あまりこころよく思っていなかった。まして、修道院のなかにイスラムの人がいるのは信じられないことであった。信徒たちはなかなかイスラムの人々と話そうとしなかったが、次第にロベルト神父の態度やイスラムの人々の寛容さをみて信頼するようになり、イスラムの人々をもてなすようになっていった。結局変わったのは、クリスチャンの態度なのである。

以上述べたロベルト神父の報告は、いくつかの重要な指摘をしている。まず第一に偏見やステロタイプの文化受容が敵対意識を助長してしまうということである。何世紀にも亘って築かれてきた、心の奥深くに根付いた偏見による「見えない戦争」がある限り、平和は築かれない。クリスチャンがまず対話を進める活動を自分たちの側から始める必要があることに気付くことが重要であろう。それゆえ、教会における対話の使命の最前線にあるのは、ピキトのような地方教会であり、BCC(クリスチャン基礎共同体)なのである。

そして、真の対話による平和構築には、このような草の根運動から始めることが不可欠である。それは、煉瓦をひとつひとつ積み上げるようなものであり、歩みの遅い、困難な過程を経なければならぬ。しかし、ロベルト神父が言うように、「われわれ人間をともに信じるなら、不可能なことはない。」のであり、「宗教・政治・文化の壁を超えて、ともに歩むことは可能」なのである。信じること、信仰を強く持つことが大切なのではないだろうか。⁽¹⁹⁾

4 草の根運動の成果

前章のロベルト神父の実例が示すように、平和の実現には民衆による草の根レベルの活動と連帯が最も大切であることが明らかとなったが、この他に村落共同体のなかから自発的に生まれてきた活動やNGOの活動もないがしろにはできない。次にその例を挙げてゆこう。

(1) ピースゾーンの歩み

南ラナオのスルタン・グマンダーの海岸沿いに「マラデグピースゾーン」という一帯がある。人口の九〇%がマラオムスリムであり、一〇%がクリスチャンである。主に北側にムスリムが、南側にキリスト教徒が住んでおり、現在は八七六戸の世帯が住んでいる。一九七八年、この地区にキリスト教徒とイスラム教徒が共存できる村を作ろうと、十三名のリーダーたちが立ち上がり、「ピースゾーン」が生まれた。ピースゾーンの発端となったのは、マヌエル・アントン（当時三十五歳）というキリスト教徒の家族をめぐる騒動であった。彼は、両親ともにスペイン系とマラオ・ムスリムの両方の血を引いており、この村に住み着いてから、二十年以上、ムスリムとのいさかいがあり、何度もマラオから追放されそうになった。また、親族のなかから犠牲者も出ている。しかし、その後、一人のマラオ・ムスリムがアントン家と和解しようという申し出をし、それ以後現在のピースゾーンが始まったのである。それによって、初めは十件ほどしかなかったキリスト教徒の家が、現在では、百戸以上に増えている。そして、四十一名の代表者が協定にサインし、地元住民はもちろん、MNL FやMIL Fの兵士たちや、PNPの警官、フィリピン軍の将校なども加わるようになった。スルタン・グマンダーの市長もこの平和協定に賛同し、この地区にオフィスを設置し、支援している。

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

この共同体では、八つの規則を決めており、平和委員会のメンバーがこれらの約束を守るよう、厳しく指導し、秩序を保つ努力をしている。万一、小競合い、ギャンブル、薬物使用など、この協定に対する違法行為を犯した場合には、この地区の拘置所に拘留される。もし、部族抗争から逃れたいと望んでいる人は、武器を捨て、この共同体の一員として生活することを誓うなら、どんな部族であれ受け入れ、援助する。このようにして、現在もこの地区では、イスラム教徒とキリスト教徒との共存が続き、平和が保たれているのである。⁽²⁰⁾

もうひとつの例としては、「トウルナンとコタバトのピースゾーン」が挙げられる。このピースゾーンは一九九〇年代の初め、住民の度重なる避難やハラスメント、殺害などから保護するために立ち上げられた。住民は自ら MILF との交渉を決意し、彼らの望みを MILF の兵士に告げると、武装集団はピースゾーンの目指していることを尊重するようになっていった。そして、いかなる武器もこの地域に持ち込まないように取り決めがなされ、農民の生活が守られるようになったのである。こうして、少しずつ敵意は薄れてゆき、正常な生活が戻り、文字通り「平和村」が実現したのである。現在では、この動きに刺激されて、州政府もインフラの整備や、住宅の確保、学校への支援などを始めている。

その後、ダウンゴスやトウルナンでは、イスラム教徒とキリスト教徒、双方から選ばれた代表者によって *ALOC Hoc Committee* を設立し、平和を維持している。このように、「ピースゾーン」は住民のエンパワメントの模範であり、非暴力の実践のモデルとなっている。今後さらにこの実践が武装勢力と政府軍とがぶつかり合う地域に広められることによって、平和が実現する可能性が増してゆくのではないだろうか。また、学校における平和教育に取り入れてゆくならば、子供たちが偏見なく育つことも可能であろう。⁽²¹⁾

(2) NGOの働き

フィリピンにおける平和構築運動を支え、草の根的対話を推し進めるのに貢献してきたもうひとつの原動力は、NGOの活動である。平和を築くには、先述の例からもわかるように、政府レベルや組織・法律などによる協定が成立してもそれを実践してゆく人々の意識の変革がなければ進歩しない。そのためには、一般民衆の中に浸透しやすいNGOの働きは大いに期待される。

現在、対話運動に貢献しているNGOとして挙げられるのは、CRS (Catholic Relief Service)⁽²²⁾やFMC S (The Forum for Muslim-Christian Solidarity in Metro Manila) などである。これらのグループは平和と和解のためのプログラムを設け、参加者が各村や共同体に戻ってその体験を分かち合い、少しずつ共同体内部から変革するように促がしている。年々その効果は表れ、いろいろな偏見や誤解から解放され、新しい共同体作りが進みつつある。たとえば、CRSの“Peace and reconciliation program”では、キリスト教徒やイスラム教徒やキリスト教に限らず、ルマド（先住民族）の伝統や信仰も尊重し、それぞれの自立を支援することが強調されている。このプログラムは、参加者に宗教間対話や文化受容に対する意識を高め、信頼関係を確立するのに大いに役立っている。あるミンダナオ南アグサン州のルマドのリーダーは、このプログラムに参加したことで民族は異なっても人間として同じ体験を持っていることに気付き、ともに分かち合うことによって、偏見や差別に対して団結し克服してゆこうという意欲がわいてきたと述べている。⁽²³⁾

もうひとつの代表的NGOは、FMC Sである。この団体は十年前に発足し、キリスト教徒にとってもイスラム教徒にとっても住みやすい国をつくること、双方の伝統や文化、信仰についてともに学習することを中心活動とし

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

ている。特にクリスチャンがもつとモロ民族の歴史を学ぶ必要があると訴えている。FMCsがマニラでの活動を通して気付いた点は、カトリック信徒がイスラムに対して強い偏見をもっていることである。ときには、この偏見が簡単な会話すら邪魔をして、両者の間のコミュニケーションを難しくしていることもある。その結果、イスラム教徒はますますクリスト教徒に対する警戒心が強くなり、両者の溝は深まっているのである。そして、宗教間対話に着手しようとイニシャティヴをとるのは、たいていの場合クリスト教徒なのであるが、このイニシャティヴは簡単には受け入れられないことが多い。従って、平和を構築するためには、モロの人々の視点で考え、モロとは何かを知り、モロの人々が不公平と感じている点は何かを理解する必要があることに突き当たったのである。そのためには特にパーソナルな関わり、パーソナルな触れ合いが大切であると感じ、クリスト教徒がイスラム教徒の家庭を訪れて交流したり、イスラムの共同体のために医療チームを作ったり、神学生がイスラムの文化や雰囲気味わうためにホームステイをするなどの企画を立案している。たとえば、クリスト教徒がラマダンの後の祝いに招かれることもある。クリスト教徒の方もイスラム教徒の家族を招いて教会へ行ったり、聖週間の典礼や復活祭とともに祝うこともある。こうして、それぞれの信仰を持つ家族が親交を結ぶことによって、「草の根」での信頼関係を築くことが、クリスト教徒とイスラム教徒との対話の重要な鍵となる。⁽²⁴⁾

残念なことに、同時多発テロ事件によって、イスラムに対する敵対意識は再燃してしまい、マニラのイスラム教徒たちは、クリスチャンネームを使って身分を隠したり、イスラムの習慣をやめなければならなかったりした。しかし、このような状況を改善するためにこそ、この草の根運動を続ける必要性和価値があるのではないだろうか。

この他のNGOとしては、女性団体の活動も始まっている。イスラム、クリスチャン、そしてルマドの女性リ

ダーが『ミンダナオ女性リーダー会議』を設立し、平和を築くという共通の目的のために結束している。⁽²⁵⁾さらに、学生の“CAMPEACE”などの平和運動も始まり、特にザンボアンガでは学生たちの平和アピールの詩やエッセイを披露し、相互理解と協力を呼びかけている。

このようなNGOの草の根運動が広がることは、一般市民の意識改革のために重要な役割を果たしていると言える。平和と対話の精神を広げてゆくには、この底辺からの働きかけと結びつきが最も効果あることは前例からも明らかである。

三 対話に必要な視点

フィリピンの教会の実例を考察してみると、これまでカトリック教会に属する人々が気付かなかった点や、反省すべき点が挙げられるのではないだろうか。それはまず、「イスラム」に対する誤解と偏見が多いということである。また、歴史や文化についての知識が不十分であるということである。イスラムの人々は先住民民族同様に、後から移住してきたキリスト教徒に追われてしまったのであり、そこから差別や貧困といった問題が起こり、両者の間に亀裂が生じてしまっているのだが、このような歴史的反省が十分なされていないのではないだろうか。つまり、カトリック教会の中にも、「征服」しようとする強者・多数者の論理が働き続け、第二バチカン公会議後「対話」が叫ばれても、結局、カトリック優位の姿勢で続けられてきたのではないだろうか。確かに公会議後、植民地的宣教の反省がなされ、諸宗教との「対話」へと移行していったが、この対話のモードには、対話を通して福音の種を蒔き、最終的にはすべての宗教をキリスト教の下に従える、あるいは包含する目的が多分にあった。これは、一種

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

の戦略的対話であり、要するに「キリスト教こそが唯一の真理であり道である」ことを伝える手段としての対話にすぎなかったと言える。もしこのような対話のモードであるなら、真の対話とはなりえないであろう。従って、真の対話となるためには、さらに大きなシフトが必要であろう。それは、エドムンド・チャイアのことばによれば、「パートナーシップ・モード」の対話である。⁽²⁶⁾ここでは、もはやキリスト教の優位性やキリスト教による完成を要求するものではなく、キリスト教は他宗教の完成を手助けするのであり、逆にキリスト教も他宗教からの指摘を受けて、自己完成を目指すことを意味する。これは、カトリック教会にとっては、かなり過激とも言えるシフトであるが、真の対話の意味を考えると、相互に啓発し、相互に浄化し、相互に向上・完成すべきものである。⁽²⁷⁾つまり、対話は同等でかつ二方向の交流であるはずである。話すとともに聞き、伝えるとともに学ぶのである。このような対話を通して、教会と他宗教はパートナーとしてともに成長してゆき、ともに巡礼の旅を続けるとき、相互に回心の道を歩むこととなりうるであろう。パートナーシップモードによる対話は人と神への愛を強調し、救いはすべての人に及ぶという点で一致するのである。⁽²⁸⁾

このような反省を受けて、アジア司教会議においても、「対話する教会」が強調されている。これは二十一世紀の大きな課題であるが、そのためには、「聴く」姿勢が重要な鍵となるであろう。それは、「霊的に聴く」ということであり、「自己を無化すること」、つまり、ケノーシス (kenosis) が求められるということである。ケノーシスにおいてのみ、他宗教のあるいは他者の神秘性に耳を傾け、心を開くことができる。宗教間対話は、基本的に人間の尊厳に基づいた交わりであろう。この交わりにおいて、共に手を携えて兄弟姉妹として歩んでゆくとき、共感できる社会を作ることが可能となるのではないだろうか。そして、この生活レベル・草の根レベルでの交流こそ、平

和構築の原動力となりうることは、先の例からも明らかであろう。

おわりに

フィリピンのカトリック教会における対話の実践を模範とするなら、対話による平和構築は決して実現不可能なことではないように思われる。これは確かに長い時間と忍耐が必要とされるプロセスであろう。しかし、この困難を乗り越えてゆく過程が、教会とキリスト者を成長させ、教会の刷新となるのではないだろうか。「一致を作り出し、和解のために働き、連帯のきずなを結び、諸宗教と文化の間の対話を促進し、偏見を根絶し、諸民族の間に信頼を生み出すことはすべて、福音化に取り組む使命を持ったアジアにおける教会にとって絶対に必要なものなので⁽²⁹⁾。」と宣言されているように、多様な文化と宗教に囲まれたアジアの教会にとって、「真の対話」こそが重要な使命ではなからうか。そして、他宗教の人々とともにパートナーとして歩む姿勢が養われ、その姿勢が個人レベルからグループ全体や教会全体へと広がってゆくとき、この対話が実現可能となつてゆくであろう。

注

- (1) 「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」(南山大学監修『第二バチカン公文書全集』中央出版社、一九九〇年)、一九七—二〇〇頁。
- (2) Rufa Cagoco-Guiam, "Media's coverage on Muslims in Mindanao and its role in the peace process," the paper reported in Asia Peace Alliance Assembly, 2002, pp. 3-5.
- (3) Autonomous Region in Muslim Mindanao (ARMM)
- (4) "Philippine News Archive of Society of ST. Pius X District of Asia," 2000/12/22, <http://www.sspxasia.com/Countries>.

フィリピンにおけるカトリック教会の対話の実践

/Philippines/NewsArchive

- (5) Abhoud Syed M. Lingga, "Understanding Bangsamoro Independence as a Mode of self-Determination," p. 4, <http://www.mindanao.com/kalinaw/peaceproc/bmoroindependence.htm>
- (6) 二〇〇一年六月二十二日。
- (7) モロ民族解放戦線 (MNLF) から分かれた、最も過激なグループであり、モロイスラム解放戦線 (MILF) も同じ「イスラム」とは認めていない。
- (8) 統計によれば、SZOPAD (the Special Zone of Peace and Development 十四の地域と九つの市) のなかで、八つの地域 (南ラナオ、北ラナオ、コタバト、パラワン、スルタン・クダラト、タウィータウィ、スルと北ザンボアンガ) が、最も貧困層 (貧困線以下の収入) を抱えている。南ラナオ州では、五一・二%、北ザンボアンガ州では六二%が貧困層を占めている。他の五つの地域 (南ダバオ、サランガニを含む南コタバト、南ザンボアンガ、バシラン) は三二・七%から四八・四%を占めている。中央政府は二〇〇〇年六月、「ミンダナオの再考案プラン」を立て、ミンダナオ州と政府軍との協力によって建て直しを図る委員会を発足した。しかし、このような機関はあまり役立っていないのが現実である。つまり、行政側からの働きかけはただ権力による行使であって、一般の人々には何の力や権利も与えていないため、自立・向上することも押さえられている。これでは、いわゆる「マニラ帝国」による植民地支配のようなものであり、ますます反政府の気運が高まってしまふ。
- (9) The Bishops-Ulama Forum のミンダナオ問題に関する声明。二〇〇〇年五月十八日、カガヤン・デ・オロ市において行われた第十三回 B U F においては、政府軍 A F P (The Armed Forces of the Philippines) とモロイスラム解放戦線 (MILF) とに、軍組織や政治的野心の目的を超え、敵意を捨てて、ミンダナオの人々の叫びに耳を傾け、話し合いのテーブルに着き、ミンダナオの平和への道をともに歩むようにと嘆願書を提出している。交渉の保証人として、イスラム側はマヒド・ムティラン博士が、カトリック側はヒラリオ・ゴメス司教、そして調停役のフェルナンド・R・カパラ大司教がサインをしている。
- (10) 二〇〇〇年五月十一日付の大司教フェルナンド・カパラの手紙 "A Dangerous Judgement" (The Bishops Ulama Forum)
- (11) 二〇〇〇年四月二十三日付のザンボアンガ大司教カルメロ・D・F・モレロス、バシラン司教ロムロ・デラ・クルス、イピル司教アントニオ・レデスマ、S. J.、ジョロ司教アンジェリト・ランポン・O M I の四名による嘆願書。
- (12) 大司教オランダ・クエヴェドの手紙、三頁。
- (13) ロベルト神父は無原罪のマリアのオブレート会の宣教師である。かれは、フィリピンオブレート管区の宗教間対話担当である。Fr. Roberto Layson, OMI, "Something Beautiful in Pikit," 2001, pp. 1-9, <http://www.mindanao.com/kalinaw/peace>

proc/pikit.htm

- (14) Ibid., p. 2.
- (15) Ibid., p. 2.
- (16) Ibid., p. 3.
- (17) Ibid., p. 3.
- (18) 一九八六年、ひとりのカトリック信徒が始めた運動であり、キリスト教徒とイスラム教徒とともに宗教間対話や平和構築を学習するセンターを設立した。現在でも大きな役割を担っている。
- (19) Fr. Roberto Layson, OMI, "Something Beautiful in Pikit," 2000, p. 3.
- (20) B. R. Rodil, "Alternative to War: Maladeg Peace Zone and Dungos Peace Pact," <http://www.mindanao.com/kalinaw/peaceproc/maladeg.htm>
- (21) "Bishops-Ulama Forum: The 11th Dialogue," 1999, pp. 5-6, <http://www.mindanao.com/kalinaw/buf/dialogues/11th.htm>
- (22) 一九四三年、第三世界の国々を支援するために、アメリカの司教たちによって設立された。一九四五年フィリピンにオフィスを開設。フィリピンカトリック教会と協力しながら、食料供給、戦争孤児の世話、健康・医療支援、農業、開発事業、人災・自然災害の犠牲者救済、平和と和解などさまざまなプロジェクトを行ってきた。
- (23) The grassroots Peace building Summit in August 27-30, 2001.
- (24) 興味深いことに、マニラのイスラム教徒は、「対話」といえば、「討論」だと思っている人が多い。それゆえ、キリスト教徒が対話のために、イスラム教徒のところへ行くと、必ず、権威をもって話のできるイマームかウスタズを連れてくる。
- (25) "Women say: Yes to Peace," Mindanao Women Leaders for Peace, April 12, 2000.
- (26) Edmund Chia, "Interreligious Dialogue in Pursuit of Fullness of Life in Asia," reported in the Seventh Plenary Assembly of the Federation of Asian Bishops' Conferences, (FABC Paper No. 92k), 2000, pp. 7-8.
- (27) Ibid., p. 7.
- (28) Ibid., p. 8.
- (29) 『アジアにおける教会』カトリック中央協議会、二〇〇〇年、七四頁。